

山間地茶樹のせん枝法改善による収益性の向上

【要約】三重県南部山間地の特産物である茶の収益安定を図るため、二番茶摘採後の整せん枝法を改善する。それには二番茶取量を確保するため、二番茶摘採後のせん枝を浅くする。また、せん枝時期は、二番茶摘採後、半月程度までに処理すれば取量、品質に大きな影響がなく、収益の向上ができる。

三重県農業技術センター茶業センター・南勢茶試験地			連絡先		05988-5-0030		
部会名	茶業	専門	栽培	対象	工芸作物	分類	行政

【背景・わらい】

中山間地域の活性化には地域に合った特産物の育成は重要である。

三重県南部山間の夏期多雨地域では二番茶摘採後のせん枝を深くする慣行がある。またこの地域は県内有数の高級煎茶の産地であるが、一番茶の取量が他の地域に比べて少なく、茶所得を向上させる必要がある。

そこで品質を維持しつつ一番茶の取量を確保させるため、慣行の整せん枝方法を改善し、市場における収益性についても明らかにする。

【成果の内容・特徴】

二番茶後のせん枝強度とせん枝時期を改善することにより、一番茶の荒茶品質の維持と生葉の増収で所得の向上ができる。

1. せん枝の強度

- ① 一番茶取量は、二番茶摘採後のせん枝を浅くした方が多くなる(表-1)。
- ② 一番茶取量は、秋整枝の強度より、二番茶摘採後のせん枝強度の影響が大きい(表-1)。
- ③ 荒茶成分(全窒素、総アミノ酸)及び官能審査評点は、二番茶摘採後のせん枝強度の影響は小さい(表-2)。
- ④ 一番茶の農家手取額は、二番茶摘採後のせん枝を浅くした方が向上する(図-1)。

2. せん枝の時期

- ① 二番茶摘採後のせん枝は、17日頃までに処理すれば一番茶の取量、品質、農家手取額に差はない(表-3・図-1)。

【成果の活用面・留意点】

- ① 山間夏期多雨地帯の二番茶摘採後の整せん枝技術として利用できる。
- ② 深刈りせん枝に比べ、病害虫の発生が多くなると考えられる。

【具体的データ】

表-1 二番茶摘採後のせん枝が翌年の一番茶に及ぼす影響 (1992, 1993)

区	二番茶後-秋整枝	整せん枝強度		翌年の一番茶取量		摘芽調査(1992) <sup>3)</sup>		
		二番茶後 <sup>1)</sup>	秋整枝 <sup>2)</sup>	1992	1993	芽数	芽重	出開度
1	浅い-浅い	-3cm	+6cm	595kg/10a	643	118本	70.9g	48%
2	浅い-深い	-3	+4	625	595	109	62.2	63
3	慣行	-8	+8	533	536	93	61.5	57

<sup>1)</sup> 二番茶摘採面からの距離 <sup>2)</sup> 二番茶後せん枝面からの距離 <sup>3)</sup> 40cm×20cmの枠組み

表-2 一番茶の荒茶成分と官能審査評点 (1992, 1993)

区	二番茶後-秋整枝	荒茶成分(1993)		官能審査評点			
		全窒素	総アミノ酸	1992外観 <sup>1)</sup>	内質 <sup>2)</sup>	1993外観	内質
1	浅い-浅い	6.16%	3.80%	15.50	23.50	19.00	29.25
2	浅い-深い	6.15	3.77	15.75	23.00	19.00	29.25
3	慣行	6.24	3.92	15.50	23.50	19.25	29.25

<sup>1)</sup> 形状、色沢各10点満点の合計 <sup>2)</sup> 香気、水色、滋味各10点満点の合計

表-3 せん枝時期と取量および官能審査評点 (1994)

区	二番茶摘採(6月25日)後のせん枝時期と強度		秋整枝量	翌年一番茶取量	官能審査評点	
	時期	強度			外観	内質
I	3日	-3cm	367	465	17.75	26.75
II	10	-3	300	466	18.00	26.75
III	17	-3	254	474	17.75	26.50
IV	10	-6~-7(慣行)	269	446	17.50	26.50

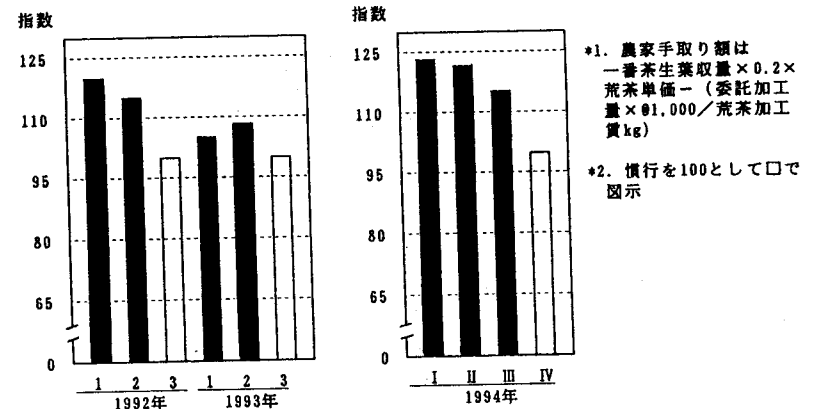


図-1. 二番茶後のせん枝と翌年一番茶の農家手取額

\*1. 農家手取額は  
一番茶生葉取量×0.2×  
荒茶単価-(委託加工  
量×0.1,000/荒茶加工  
費kg)

\*2. 慣行を100として□で  
図示

【その他】

研究課題名 山間多雨地帯における整せん枝技術の確立  
 予算区分 県単  
 研究期間 平成6年度(平成4年~6年)  
 研究担当者 松尾 昭彦